

江戸時代人及び文学による日中文化交流

徐 金鳳

The Cultural Exchange by Man and Literature Between Japan and China in The Edo Period

Jinfeng XU

瀋陽航空航天大学外国語学部 長崎県立大学国際社会学部

抄録/概要/要旨 本論文は、江戸時代に長崎を通じて日本へ渡来した文人及び唐船貿易により日本へ伝えられた明清小説の江戸文学への材料の提供、江戸文学の繁盛と「いき」の美意識の繋がりについて分析しようとした。渡来僧隠元が黄檗宗を、朱舜水是水戸学、儒学の庶民までの普及は日本文化の各方面に影響をもたらした。

キーワード： 江戸時代¹、明清小説²、「いき」³

1. はじめに

日本と中国との交流の歴史は随分ながくて、歴史上考察できるのは紀元前3世紀からであり、中国の研究者は中国の歴史区分によって四つの時期に別れている。第一時期は紀元前3世紀から6世紀まで、中国の秦・漢・魏・晋・南北朝時代にあたるが日本は大抵弥生時代、大和時代の前期にあたる。第二の時期は6から9世紀までであり、中国は隋・唐の時代で、日本は大和後期・奈良時代・平安時代である。遣隋使・遣唐使・留学生・留学僧などが文化交流の大きな担い手となった。第三の時期は10世紀から14世紀までで、中国は五代・宋代・元代にあたり、日本は平安時代後期・鎌倉時代・室町時代後期であった。この時期は貿易の交流、僧侶の往来が繁盛であった。第四の時期は14世紀から19世紀までである。中国は明の時代・清の時代、日本は室町後期、安土桃山時代・江戸時代である。特に江戸時代に入ると、中国の明が清によって滅びられ、多くの中国人が日中の唯一の貿易港である長崎へ渡来した。江戸時代初期は長崎に在留する中国人の数は五千人を超え、時には一万人にも達したと言われています。実に当時の長崎の総人口の六分の一にもあたる膨大な数であると言われた。¹⁾

2. 人による交流

以上の四つの段階は古代と呼ばれて、主に中国文化の日本への輸入であると言われるが、カルチャの交流は一方的ではなく、唐の時代には文化受容に開放的で、各地域の風俗・生活習慣を受け取れたように、日本文化からも必ず取り入れたが、現在までこれについての研究はまだなされて

いないようである。また、江戸時代までは中国文化の受入れ主に皇族・貴族などで、庶民までには広まっていなかったのも定説になっているようである。江戸時代になって、儒学を始めとする中国の文化が庶民教育の普及によって広がった。

2.1 仏教思想の定着

1603年、徳川家康が天皇に正式に将軍として任命され、安定して国内体制の構築に集中した。鎖国政策¹⁾のもとに、長崎だけを外国貿易のやり取りを許可し、主に中国との貿易を行った。長崎は唐船(朱印船)でにぎやかであった。

九鬼周造の「日本文化論」によると、日本文化はインド、中国、西欧の文化の合体であると言われてる。インドと言っているのは仏教のことであろう。周知のように、中国の仏教も日本の仏教もインドと違って変容した仏教である。隠元の渡来は日本の仏教に大きな生命力を注いだ。

仏教の中国への伝来は漢の時代にさかのぼるが、普及したのは乱世の南北朝時代で、唐になると周知の『西遊記』の主人公である玄奘が登場して、仏教の広げに大変重要な人物であった。遣隋使と遣唐使の殆どが留学僧であったのも仏教の日本と中国での高人気の証であると思う。日本の仏教の大繁盛期も南北朝時代であるが、鎌倉幕府、室町幕府は皆お寺に熱中したようで。その時は「五山文化」²⁾も現れた。考えてみると、「仏教」は乱世に適応した信仰であるからだろう。『平家物語』の冒頭で書いてあるように、

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。奢れる人も久からず、ただ春の夜の夢のごとし。猛き者も遂にはほろびぬ、偏ひとへに風の前の塵におなじ。(『平家物語』第一巻「祇園精舎」より)

「諸行無常」という仏教の最もわかりやすい考えは乱世に生きている人々の「世事」に対する無力感と諦めであり、「浮世」のイメージが強い。キリスト教のように救いと罰を与えてくれる「天父」がないので、諦めるしかないアジア文化圏の人々にとって、仏教思想は受け入れやすい宗教であろう。

2.2 隠元と黄檗宗

高僧隠元が1654年来日し、二十人の弟子を引き連れて長崎に至り、興福寺に入ったが、後に崇福寺に移り、さらに江戸に出て、1659年四代将軍家綱に宇治の寺地を賜った。隠元はここで明朝風の伽藍を構え、黄檗宗の本山万福寺を建てた。万福寺にて隠元は明朝風の法式勤行を行い、特異な念仏禪を挙揚し、黄檗宗の系統を作った。この新来の禪に日本僧が相次いで参じたが、とくに儀礼の面で日本の禅界に多大の影響を与えた。さらに隠元の弟子木庵性瑫や即非如一も渡来して隠元の教化を助け、またこの系統に高泉性激、鉄眼道光、竜溪性潜などがいて、その発展に大きな役割を果たし、黄檗宗は隆盛に赴いた。

とくに木庵性瑫は黄檗宗第2世となり、のち江戸瑞聖寺を開山、関東に黄檗宗の基礎を据えた。また5世の高泉性激は中興といわれる。その後万福寺は13世竺庵まで中国僧によって受け継がれたが、14世竜統以後は日本僧も住持するようになった。21世大成以後しだいに衰微し、33世良忠が宗門を刷新し再興を図ったが、1874年(明治7)臨済宗に合併された。しかし、1876年にふたたび独立、1952年(昭和27)に宗教法人法による認証を受けた。今日、法系としては臨済宗の白隠慧鶴の系統に変わったが、中国風の法式勤行は現在も伝承されている。現在寺院500近く、信徒35万人ぐらいい擁している。²⁾

なお、隠元とともに渡来した文人工匠らによって、普茶料理や煎茶などの生活文化、また明朝風の建築様式・画像・彫像・詩文・書などの黄檗風といわれる文化が移入され、日本で独特の発達をみせた。黄檗宗は飲食・宗教などをはじめとする日本文化に多大な影響を与えた。

2.3 儒学の普及

隠元が黄檗宗を開山した1659年に、朱舜水が7回目に長崎に到着した。朱舜水は長崎に滞在の5年間に安東省庵と極親密な関係を結んだ。徳川光圀の招聘に応じて水戸に移した朱舜水は古学・実学・水戸学に大きな影響を与えた。

実は儒学も最初は普通のものではなく、寺で研究・研鑽されたようで、独立されたのは江戸時代になってからである。江戸時代になると、徳川幕府が仏教だけではなく、儒学も重視するようになった。

江戸時代の儒学の本拠は五代将軍の綱吉の発意によっ

て、忍岡の聖廟と林家の家塾が神田の湯島にうつされました。いまも湯島には壮大な規模の聖堂「昌平黌」がある。

諸大名も次々に学校を建て、藩士の教育に力を入れた。資料によると、藩校の数は多く、江戸時代を通じて300を超えたようである。大名たちが如何に人材の養成に心を砕いていたがわかるであろう。

また、儒学者の開く私塾³⁾もあった。私塾には武士の子もまで通い、朱子の四書集注を始め、相当高度に漢籍まで講述した。儒学の道德観及び中国の古典文化は、藩学や私塾などを通じて、重要な教養となっていた。

藩校と私塾の拡大に従い漢籍に対する需要も増えてきた。長崎を通じて購入の他に、和刻本も出現した。この漢籍に対する需要は日本の印刷術を高め、江戸文学⁴⁾の繁盛の技術的な保証を提供した。

昌平黌・藩校・私塾の他に、庶民の子女の為には寺小屋があった。特に江戸後期になって、庶民の生活にゆとりが出ると、寺小屋も普及した。寺小屋の教材は「読み・書き・そろばん」を主として、漢文の教科書がごく初歩的なものであったが、読本・洒落本・滑稽本・草双紙・人情本などの読者層を養成した。

江戸文学は天明から文政のころ最盛期を迎え、読本・洒落本・滑稽本・人情本・黄表紙・合巻・川柳・狂歌などがあり、通を尊び、軽快・洒脱の傾向が強くなり、山東京伝・滝沢馬琴・式亭三馬・為永春水などが人気の作者であった。

3. 文学による交流

文学による交流は主に「明清小説」と「江戸文学」を巡って考察しようと思う。此処の明清小説は「白話」小説である。明と清の時代は小説の繁盛期で、短編と長編に別れている。内容から大体「歴史」「志怪」「才子佳人」「武勇伝気」「公案」などに分けられる。体裁は章回体で、勧善懲悪の道德の目的が明確であることが多い。

長崎を通じて中国からの輸入品と言えば主に生糸・絹織物・薬剤・染料など商品であるが、書籍もあった。『三言二拍』と四大奇書⁵⁾といわれる『三国志演義』『西遊記』『水滸伝』『金瓶梅』をはじめ、数多くの小説が持渡書として日本へ伝えられた。

宝暦4(1754)年小説持渡書を調べると、『金云翹伝』『平山冷燕』『绣像梦月楼』『麟儿报』『桃花影』『绣榻野』『两交婚』『蝴蝶梦』『终须梦』『定鼎奇闻』『浓情快史』『引凤箫』『玉楼春』『杏花天』『五凤吟』『画图缘』『玉支矶』『巧连珠』『说唐后传』『女开科传』『贪欢报』『锦香亭』『肉蒲团』『西遊記』『李卓吾先生评三国志』『凤箫媒』『石点头』『归蓬梦』『醉菩提』³⁾などがあつた。これらの作品は江戸文学の多大な材料となった。

3.1 「明清小説」と翻案小説

江戸時代に中国の小説を材料にした翻案作品が多く作ら

れた。上田秋成の『雨月物語』は『三言二拍』から、三遊亭圓朝のレパートリーとして知られる『牡丹灯籠』が明代の『剪灯新話』から、山東京伝の『忠臣水滸傳』は『水滸傳』からの翻案であるのも、その有名な例である。

翻案小説を調べてみたところ、当時よく翻案されたのは『三言二拍』であることがわかる。三言二拍は中国明末に馮夢竜・凌濛初らが編纂した通俗小説集の総称である。馮夢竜編の3部を三言(『喻世明言』), 『警世通言』『醒世恒言』, 凌濛初編の2部を二拍(『初刻拍案驚奇』『二刻拍案驚奇』)という。宋・元・明3代にわたって書かれた1巻1篇の話本・擬話本(口語体の短編小説)が収録されている。凌濛初編に重複1巻, 雑劇の戯曲が1巻あるため, 合せて198篇の短編小説からなる。⁴⁾次の表は代表的な翻案小説をまとめて作ったのである。

表1. 江戸時代翻案小説一覧

作者	作品	中国原作	原 作 作 者
都賀庭鐘	『古今奇談英草紙』 『古今奇談繁野話』 『古今奇談莠句冊』 『四鳴蟬』	『三言二拍』	馮夢竜 凌濛初
山東京伝	『忠臣水滸傳』	『水滸傳』	施耐庵 (或いは羅貫中)
上田秋成	『雨月物語』	『三言二拍』	馮夢竜, 凌濛初
西田維則	『通俗西遊記』	『西遊記』	吳承恩
浅井了意	『伽椰子』	『剪灯新話』	李昌琪 瞿佑
松村操	『原本解译金瓶梅』	『金瓶梅』	蘭陵の笑笑生 ^{†6}
神田为民	『艶情異史』	『聊齋志異』	蒲松齡
曲亭馬琴	『椿説弓張月』	『水滸後伝』に構想を借りている。	
	『近世説美少年録』	『樗枰閑評』に主筋の構想を借り, 脇筋を『緑牡丹』『水滸傳』『源氏物語』等から	

		取る。	
	南総里見八犬伝	勸善懲悪をテーマに, 中国の『水滸傳(すいこでん)』『三国志』を参考に	

以上のように, 中国の白話小説特に馮夢竜『三言二拍』・羅貫中『三国演義』・施耐庵『水滸傳』などが江戸時代に翻案されたりして, 日本の読本・表紙などに多大な素材を提供した。

3.2 『平山冷燕』と『桜姫全伝曙草紙』

『平山冷燕』は才子佳人小説で, 全20回で構成されている。編者は荻岸山人とあるが未詳である。書名は作中の二組の男女, 平如衡と山黛・冷絳雪と燕白領の姓をとったもので, 内容は白燕の飛ぶのを見て天子が詩を求め, 大学士山頭仁の娘黛の献上した詩を賞賛して玉製の尺を賜る。冷は売られて黛の侍女となるが, 詩才で天子に知られる。平と燕は, 黛と唱和をして詩才を争ったことで他から非難されるが, 科挙の試験に首席, 次席で合格したので, 天子は山頭仁に命じて山と燕, 冷と平を結婚させるというもので, 女性の詩才を賛美する点が清代を反映している。

『桜姫全伝曙草紙』は山東京伝作で, 丹波桑田の鷺尾家のお家騒動にからむ復讐談を骨子とし, 清玄桜姫の伝承を導入して因果談的趣向を重ねあわせた伝奇小説である。好評にこたえ, 後にこの筋をとって京伝自ら合巻『桜姫筆再咲』を出した。

『平山冷燕』と『桜姫全伝曙草紙』はともに20章から構成され, ストーリーのラインも出会い(情の芽生え)→情の深め→悪人に遭遇→一緒になる(大団円)で連なっている。最後に『桜姫全伝曙草紙』は日本の独特の悲しみに合して, 桜姫は結局死んでしまい, 死後は桜の木に生き返え, 清玄の傍に立つ形で「団円」の結局になる。

表2 『平山冷燕』と『桜姫全伝曙草紙』各章回のタイトル

平山冷燕	『桜姫全伝曙草紙』
第一回 太平世才星降瑞	第一 弥陀二郎網して仏像を得る
第二回 圣明朝淑女献箴	第二 鷺尾義治玉琴に惑溺す
第三回 金闺女诗嘲狂士	第三 野分の方嫉妬玉琴を害す。
第四回 玉尺楼才压群英	第四 玉琴の魂魄胎子に還著
第五回 山人脸一抹便转	第五 轎裏書を遺して公連罪を償う。
第六回 才女心百折不回	第六 野分の方季春桜姫を誕んず

第七回 道路上美还遇美	第七 清水の清玄桜姫を眷恋す。
第八回 闺阁中才不让才	第八 清水を退去して清玄落魄す。
第九回 误相逢才傲张寅	第九 蝦蟇を啜えて小蛇両士を会わせしむ。
第十回 巧作合诗骄平子	第十 桜姫宗雄を慕いてひとたび病に臥す。
第十一回 一首诗占尽假风光	第十一 夜第を襲いて勝岡義治を亡す。
第十二回 三杯酒透出真消息	第十二 蝦蟇丸の傳、帯取の池の記。
第十三回 观旧句忽尔害相思	第十三 盲女小萩雪中にきう死す。
第十四回 看梅茶默然投臭味	第十四 二人比丘尼発心の記。
第十五回 悬彩笔直求淑女	第十五 桜姫薄命を悲しみて、ふたたび病に臥す。
第十六回 扮青衣巧压才人	第十六 桜姫甦生す、清玄枉死す。
第十七回 俏佳人代丑汉呈身	第十七 鷲尾の家士故君の讐を復す。
第十八回 痴公子倩佳人画面	第十八 桜姫妖気に魘はれて三たび病に臥す。
第十九回 道路联姻奇作合	第十九 桜姫離魂化して骸骨となる。
第二十回 金銿报捷美团圆	第二十 桜塚楊貴妃桜の来由。

構成とストーリーが似ているほかに、女主人公はともに美貌で、才情ある点も一致している。

『櫻姫全传曙草紙』櫻姫は「中国の美人楊氏（楊貴妃）、虞氏（虞美人）、王氏（王昭君）などは見たことが無いので知らないが、二度と同じ天地にあるだろうとは思われない。

嬋娟（姿の美しいさま）たる両鬢（髪の左右）は秋の蟬の翼に似て、宛転（ゆるやかな曲線）たる双蛾（眉）は、遠山の色に見える（白居易の漢詩・嬋娟両鬢秋蟬翼、宛転双蛾遠山色）であるに対して『平山冷燕』の山黛は「生的美如珠玉，秀若芝兰，洁如冰雪，淡如烟云”，“眉如初月，但安鬢角正思描；脸似含花，艳敛蕊中犹未吐。发绾乌云，梳影垂肩复额；肌飞白雪，粉光映颊凝腮”。“肢体轻盈，三尺将垂弱柳；身材娇小，一支半放名花”である。

この才子・佳人の愛情，善を勧め・悪を懲罰説教は当時の文学の傾きでもあった。それから、金持ちになった町人の遊びを内容とした文学も流行り、特に元禄から町人の美意識「いき」が生まれたと思う。

3.3 「いき」と「才子佳人」小説

「いき」とは、江戸時代に生じ、時代に従って変転した美意識で、遊興の場での心意気，身なりや振る舞いが洗練されていること，女性の色っぽさなどを表す語です。また「いき」は単純美への志向であり、「庶民の生活」から生まれてきた美的観念である。

九鬼周造『「いき」の構造』（1930）では、「いき」という江戸特有の美意識が初めて哲学的に考察されました。九鬼周造は『「いき」の構造』において、「いき」を「他の言語に全く同義の語句が見られない」ことから日本独自の美意識として位置付けた。外国語で意味が近いものに「coquetterie」「esprit」などを挙げたが、形式を抽象化することによって導き出される類似・共通点をもって文化の理解としてはならないとし、経験的具体的に意識できることをもっていきという文化を理解するべきであると唱えた。

中国語の翻訳では「いき」そのまま、「粹」・「审美意識」・「义气」など様々ある。また別の面として、「いき」の要諦には江戸の人々の道徳的理想が色濃く反映されており、それは「いき」のうちの「意気地」に集約される。いわゆるやせ我慢と反骨精神にそれが表れており、「宵越しの金を持たぬ」と言う気風と誇りが「いき」であるとされた。九鬼周造はその著書において端的に「理想主義の生んだ『意気地』によって霊化されていることが『いき』の特色である。」と述べている。

「いき」の内包的構造としての三つの徴表「媚態」「意気地」「諦め」とは、いずれも異性に対する態度である。媚態とは、一元的の自己が自己に対して異性を措定し、自己と異性との間に可能的関係を構成する二元的態度である。二元的な可能性は媚態の根本的存在規定である。ところが、媚態は最初から最後まで常に存在しているわけではない。異性が完全なる合同を遂げて緊張性を失う場合には媚態はおのずから消滅する。異性間の尋常ならざる交渉は媚態を前提としている。媚態は異性との間に可能的な関係を構成する態度であるとするなら、意気地は異性に対する一種の反抗を示している。即ち異性に対して媚態でありながら、反抗の強気を持っている。最後の諦めとは運命に対する知見に基いて執着を離脱した無関心であると九鬼周造は言っている。

元々「いき」の主体者である芸者は特殊な社会的存在として、恋の実現に関して幻滅の悩みを経験させる機会を与えやすい。真心が絶えず裏切られるにつれて、異性に対する淳朴な信頼が失ってからこそ、諦めの境界に入るわけである。このさっぱりと諦めるころは決して無代償で生まれたのではないだろう。

考察してみれば、九鬼周造の「いき」の本質である「媚態」「意気地」「諦め」は中国の「青楼」の才女のイメージにも似ていることがわかる。

九鬼周造は「いき」の構造を解釈、特に「いき」の自然的表現を闡明するとき、人情本などの描写を引用して、異

性である他者の立場からの聴覚と視覚に重点をおいて説明している。

調べてみたところ、中に一番多数引用されたのは為永春水の作品であることがわかった。前後合わせて28箇所までもあり、内包的構造の章では5回、外延的構造では8回、自然的表現では7回、芸術的表現では7回、結論の部分でも引用があった。引用した内容を分析したところ、『春色梅児誉美』からの内容が多かったこともわかる。

ストーリーの展開から言うと、『春色梅児誉美』は情を結ぶ→悪者により乱を生じ→困難を経験→団円という中国の「才子佳人」小説のある筋で進んでいる。

江戸時代には山東京伝のような有名な翻本もあるように、為永春水も中国から伝来したいわゆる「才子佳人」小説を読んだのではないかと考えられる。

「いき」の担い手である遊女の優れた才能、媚態、俗っぽい有権者への反抗なども中国の「才子佳人」小説の「青楼女子」のイメージと一致している。

4. おわりに

江戸時代に幕府が鎖国令を出したが、中国との貿易が盛んに行った。長崎は貿易の窓口として「唐船」でにぎわった。「唐船」に載せて日本に伝来した本が貿易の総額からいうと極少ないほうであるが、儒学・医学・絵画のほかに、いわゆる「通俗小説」も流入した。

山東京伝・都賀庭鐘・浅井了意・上田秋成などはこれらの「通俗小説」を翻本する作品が残されている。文学をはじめ、日本文化の多いところに中国の伝統が見られる。周作人などが日本留学に来た時、非常に親しい感じがあるのは、文化的な共感があるからだと思う。

明治時代から日本は西洋文化の受容に力を入れて来た。日本留学して帰国した中国の知識人たちは「文学結社」を通して、中国の近代文明社会へ導こうとしていた。当時の中国文壇の大半は日本留学生の作ったものである。創造社の主要作家はすべて日本留学生であり、語糸社もそうである。このほか、欧米からかえった新人もいくらありましたが、彼らの努力と貢献は、日本から帰国した流派には到底及ばなかった。しかも、日本留学派の影響も受けていたのは周知である。

グローバル化の拡大により、カルチャの複雑化も益々進んで行くにはちがいない。「カルチャ衝突説」と「融合説」が並存して、他文化・多文明を絶対許さない国や地域もあるが、アメリカや日本のように多文化・多文明の共存している国もある。多文化を受容・変容する点では、日本はアジア諸国のモデルに成れると思う。

謝 辞

長崎県立大学国際社会学部にて客員研究員としていた間、皆様は大変お世話になった。この場をお借りして、皆様一同に感謝の気持ちを表したいと思う。

(2021.11.5- 投稿, 2021.11.5- 受理)

文 献

- 1)山口修:”日中交渉史”,東方書店,1996
- 2)コトバンク:黄檗宗,
(kotobank.jp)<https://kotobank.jp/word/%E9%BB%84%E6%AA%97%E5%AE%97-38836>
- 3)大庭脩:”江戸時代中国文化受容研究”,株式会社同朋社, 1984
- 4)三言二拍:
Wikipediaht,[tps://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%89%E8%A8%80%E4%BA%8C%E6%8B%8D](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%89%E8%A8%80%E4%BA%8C%E6%8B%8D)

†注/用語解説

- †1 Ezra・F・Vogel は『日中関係史』では従来の「鎖国は誤った説明で、実際には徳川家康もその後継者も明朝の始祖朱元璋と同様に海外貿易及び外国との関係をしかり統制しながら維持しようとしていた」主張しているが、証拠としての資料が出さずに推測みたいである。
- †2 五山禅林において行われた文学で、漢詩文を表現の手段とする。鎌倉時代から江戸時代の初期にかけて膨大な数の作品がつけられたが、もっとも盛んであったのは南北朝時代から室町時代の前期にかけてである。五山とは、五つの臨済宗の大寺院を意味し、幕府の定めた寺格の最上位を占めるものである。五山の寺数とその序列はときによって変動しながら、1386年にはほぼ最終的に次のように決定した。五山第一から第五まで、鎌倉では建長寺・円覚寺・寿福寺・浄智(じょうち)寺・浄妙寺。京都では天竜寺・相国寺・建仁寺・東福寺・万寿寺の各5寺で、この鎌倉五山、京都五山の10寺の上に南禅寺が置かれた。以上の11か寺を五山(叢林)と称する。五山文学というとき、この五山制度内の寺院を活躍場所とした禅僧の文学に限る場合があるが、五山制度外の禅寺をも含んだ中世の禅林全体の文学を概称するのが穏当である。
- †3 近世より近代初期にかけて、民間の学者が自己の学問的立場に立って開設した民間学校(塾)。一般に寺子屋より高い程度の教育を施した。幕府、諸藩の学校(昌平坂学問所・藩学)が未整備の段階では、私塾が正規の学問・教育の場として機能した。幕藩の統治政策に合致した諸学校が整備されると、私塾は公的学校の補完的存在として、あるいは新しい学問・教育の場とな

った。漢学の咸宜園（広瀬淡窓）、古義堂（伊藤仁斎）、国学の鈴屋塾（本居宣長）、洋学の適塾（緒方洪庵）、鳴滝塾（シーボルト）、慶応義塾（福沢諭吉）、政治結社の私塾として松下村塾（吉田松陰）などが有名である。

- †4 江戸時代の文学中、中期以後江戸でつくられたものの総称。多くは元禄期の文学を上方文学と称するのに対していう。元禄を中心とする上方文学がやがて惰性に流れて生命力を失うと、18世紀後半、文学の中心は江戸に移り、軽妙さ、渋み、粋といった江戸趣味を背景に、独特な性格をもつ江戸文学が成立した。全体に滑稽諧謔を好み、趣味的で、末期のものは退廃的である。狂歌に四方赤良、朱楽菅江、川柳に柄井川柳、狂文に風来山人、手柄岡持、読本に山東京伝・滝沢馬琴、洒落本に田螺金魚・山東京伝、滑稽本に十返舎一九・式亭三馬、人情本に為永春水・鼻山人・草双紙（赤本、黒本、青本、黄表紙、合巻）に恋川春町・朋誠堂喜三二、歌舞伎脚本に鶴屋南北・河竹黙阿弥、江戸小咄に烏亭焉馬らが出て、それぞれのジャンルの盛行をもたらした。ほかに雑俳も盛んであった。
- †5 四大奇書は『三国志演義』『西遊記』『水滸伝』『金瓶梅』であり、四大名著と言われるのは『三国志演義』『西遊記』『水滸伝』『紅樓夢』である。
- †6 簡体字表記: 蘭陵笑笑生であり、本名不明、生没年不詳である。中国では「蘭陵笑笑生は誰か」かは、現在にいたるまで論争が続いている。蘭陵笑笑生は生きていたと推定される中国明代の、他の文人であったのではないかという別人説もある。中国金瓶梅学会の元副会長を務めた研究員、呉敢によれば、王世貞・屠隆・李開先・徐渭・王穉登・賈三近らが蘭陵笑笑生と同一人物ではないかという説を挙げている。